

# 美作孝民記

五

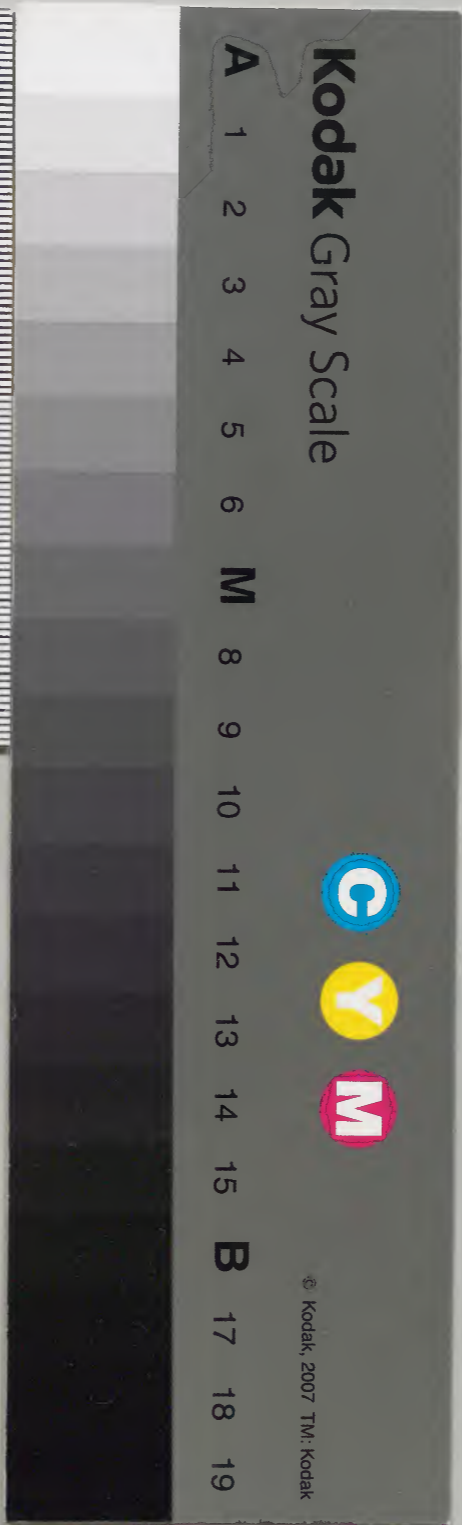
谷家傳

庫	文	閣	内
五八函	三三九文	和	書
八架	一〇册	號	類



内閣文庫		
番號	和	33960
冊數	10 ( 5 )	
函號	158	113

共十



美作孝民記卷之五

美作 甲田行喜集録

○丁子屋源左衛門

源左衛門と西新町より丁子屋とて業種と齋なり幼  
 少より父母より孝公厚く生質柔順とて万事ふろく  
 懐りし街率ゆつりても絢きまればあふとつと頤と  
 頼ましく礼容厚し其意を渠が言即市令の命なる  
 ゆゑ畏ま敬せり父族大の症とて三年余費経

の飛りて頗難治の趣より源左衛門いづく進一之医  
 療者獲る夜心かとて幸に治とゆふ時父  
 母病中づうこれ祈願かりて上方明神をり  
 梳りと欲しておぼふ懼り源左衛門を  
 どもごらぐ思ふと勞て路費と辨も亦父  
 母のまじいけり既よ終りよ赴くも上途乃  
 相より源左衛門父母送る郷の初りも毎  
 朝去社お宿りて父母帰るゆりし

相もふまじいけり源左衛門いづく進一之医  
 療者獲る夜心かとて幸に治とゆふ時父  
 母病中づうこれ祈願かりて上方明神をり  
 梳りと欲しておぼふ懼り源左衛門を  
 どもごらぐ思ふと勞て路費と辨も亦父  
 母のまじいけり既よ終りよ赴くも上途乃  
 相より源左衛門父母送る郷の初りも毎  
 朝去社お宿りて父母帰るゆりし

父と進めく遊びしむる酒料を懐中きりて  
 紙銀文を孔方をも相懸よ父の使節不入き  
 持しむる父の刻しる中に見えり父帰る時  
 少し進めくしむるいよりももれし  
 孝女よ公とて第一家の貧乏は父母おきせ  
 ぐらに相懸よ父使節をけりていさ  
 せりま程よ父天をぬきも生涯飽まで  
 樂しき事なりとて人叔後よ母おつる親いよく

深く平生相氣の友と看せし  
 死語浮気ふの類までも  
 僧ふり南阿大師めぐりて寺院を巡りて  
 母を奉ふ友と出りて源氏後  
 兼げく著るも必用い疾く  
 送る體も致しき出りて  
 伴い帰る宅よ入るハ草鞋とぬがせ湯と  
 洗ふるもさるがれ物御小芳と耐えん

美作美談 卷之三



をうらふよむびも側ふつゝいきて相急の用をたなけ  
多集うてかた途へ帯よ母の芳助と慰教る體さうく  
他の同ドもどろれ童く又格ふるるとも和躬て宗助  
稍ナニ四男お及びくハ母の貧苦は助んと志つゝく  
厚く柳の雜品は荷し賣よを郷へ通い又を問ふる日  
傭とかせださまぐくんは記つて働るどもおひ賣と  
輕記品僅のりさうの日傭もよおれゆへ賃後さうく  
少く所詮翻不供どろふ過ど然きども実貞お考ん

厚くゆへ人々も憐れと加へてかゝるもさう為れ能う  
にまゐりてはうじけきぬる故ふ年と追へ成合よ  
そびいりて母もんと安んぢり毎朝宗助早く起出  
水と汲みお茶と取りおあせ茶と蒸し湯と沸し輕き  
合味とけきり並母の目さうけ静ふ寤い煙盤に  
烟管とちとく枕邊おより烟草と吸いさうて母よ  
備り母起あまばも水を湯をも水をも時お煮く  
母の好みにけいけいけりさう並る合味は供し茶と備

美作義民記 卷之五

二

髪かみの乳ちちも紙し抗かたらざる扱あつか羽は版ばんも母ははの好このりるおと酒さけの  
 るみつとも急いそぐに母はは多おほ敷し乳ちちと嗜あそぶ宗そう助すけの心こころ  
 けおと酒さけへ進すすむほも好このめるゆへに合あ牌はいの回まわりも酒さけ  
 敷し乳ちちと求もとめ母ははの好このまよけさうお酒さけへとむ宗そう助すけも日ひ  
 け働はたらくとぬく其その日ひ紙し送おくる身みるはづいけとも價あはさし  
 ちるまじも酒さけ敷し乳ちちと求もとめざる日ひをなす賣うめ紙し花はなの  
 出いる日ひをぬき中ちゆうの合あわさけく酒さけへ並ならぶ退ひ居いる  
 と紅べに隣りん家のかのん易やすき人ひとをたのむ酒さけ敷し乳ちちの乳ちち酒さけへとむ

ちち貯たくわへるに身み後ごの内うちとをておし並ならぶ暮くる家か  
 ちちも大おほ概がい刻こく限げんとたぐと帰かへるをておし母ははと看みる  
 おまじり苗なえ中ちゆうの安やす否ひとぬき酒さけへ並ならぶ退ひ居いる  
 帰かへる草くさ鞋せとぬき火ひとぬき酒さけへ並ならぶ退ひ居いる  
 茶ちやと煎せん湯ゆとぬき母ははの浴ゆ湯ゆかごと取とりておし  
 夕ゆふ飯ひるまい例れいのどく母ははの好このま急いそぐ酒さけへ進すすむ合あ牌はいはよ  
 烟たばこ盤ばんよ火ひと成なる指さし出です母はは烟たばこ管かんと名な上うす街まちに  
 内うちよ母ははの後ごとどく肩かた背せと撫なでる日ひれ高たかひの



美作国

美作国



巨細紙 謔るふ母の喜ぶやうに 信り成し後寝所  
 かなご懇よおらつらひく公く休しむるの毎夜同  
 日傭ふ出る日も 母終日れ食ぬ夜の肉よそれく相  
 再起出く火とぶふがしやぶぶめれ海むやに申し  
 至く出向るがも地取よ二夜も洋留とれ相益益  
 とらぶごさりのおも母のつまぐりたを整して必そ  
 日お久る又人よ傭はるも遠く使とるのみわご懐  
 も多きれども毛も約ごご只申日一日のかせだのそこ

傭はる家をも食膳の具お如し固於甘味おらる  
 よ達へが我を食せ次持ゆりて母よそむ武の地席お  
 酒をさうりごとと看くは母の嗜を思ひ出くがる次  
 求りてアそ侑じ又傭をさけりる日もおれ透もる  
 ん母と見るぬお家屋おゆきしれども勤めらわし  
 妨ごど孝公よて又働の実意るる人皆能志する  
 ゆふいよく懐をかきふとや思ドてそだ懇も  
 かとつるく遠く出だ母と慕ふ誠を玉て厚く候も



○黒田尾藤吉

友吉と新魚所よ黒田尾とて負し居者なりも貞実  
 あり父母も孝なり尤も父母の口體とまじく人にお仕  
 せど止むとゆい武家へまゝに出る價と年々父  
 母も終る朝夕炊烟の料も倍々友吉主人も扈後  
 て浪蕪お在りたる父母の拙雪も壓さばく願せぬ  
 る氏守も暇と申し故郷へ走り歸りて父母と惜も  
 よ移りしめも身と共に住りて今も両親は老ぬれば

友吉もさうせだと止め僅のまゝと言ひ父母をまゝに  
 く負し居たりも父母安心せりともや時は父を病急症  
 あり終る病中乃看護没後の悲傷見聞く人  
 感心せざるなりと後友吉病身も成りしは世に  
 逾寡しかりたしは佛をんま住せど母も老衰も病  
 をかりし記居るにさうも然も友吉醫療を加へ  
 神佛と祈るさめぐ及ぶけの心とせり友吉人小  
 傭りし御の賢治を得る母も老くも終日傭りし

ては母のよめをえりて武の哲財を所への使裁を  
半日ばかりも傭つてのさうし替くても出るさうに  
母の食お極固版やうれ品と酒へ菜のおもをえらへ  
ほどくゆへ母れ伏しなげうんほせよ引あせて食次  
るやうに役も並くするさうに母事には浴湯と好  
めるゆへよめはえりて入浴せしむるのさうにやうに  
夜に髪お掃と入さうに怠屈せざるやうにんと付平生  
母の嗜める食おと、動するさうに求め並くするさうに

友吉孝老お極りてゆへと申にさかたけ家  
うさでも母さんお是さうにたうりておは  
お積りて紙の空しく成めるお友吉はく世々事  
これ邊に厚くばいさうにぬてたん

右丁子屋 業屋 黒田屋 三孝子 褒賜らじ

とよまもはも、料いさう洋おせびさ中には黒田屋  
友吉孝老のいかにあつてつて人も誠のつらうに  
四千人よりお経て後までお娘一清におく物

縁えざりきりしにま候もふ人の美談み入りし

○備前を志す

きり安岡河内前を志すまといり者の娘なり父志す  
痲疾めりりあ遂にどかえん正にかぞいけ  
るに小児とつづふよりもじつうかき母を貝内患  
く候に雙明と喪い父母共は廢人なり志す賣浴湯  
盤と撰生綿軸賃と働む父母と志す父志す妻起  
遂に心も小児のどくなくばむぐれ食ぬをこほ

おきい志ら成候もき怒り責めしむ志す  
を柔如くしていつともんよ取らつてり父あはれと  
ゆきち孝にそれ時かと考へ抱き助きてり  
時分抱きよもく進むれも例の父なり小児れ  
名別るにむくく嘆くいさむりらるるを候  
至れまば遺溺遺尿の行はふ却て又志すと  
それゆへに涙もろくいういとねを志す  
寒具やりのぬと持げえてままでとろく  
接りかき

是と多しとせんといふは、父機姫よげふ葡萄つ取り舎に  
 そはわでよ二便の用を併とるに夜とけり母に起居に  
 けいも盲人といふは二便も外に用も留まら母れも  
 て相もがけけりといふは風呂の家業の本され日頃  
 久段もく焼き沸し父母の用も此間もよと日夜と  
 かごと綿を繰りこままぐれ態多しといふは、身  
 軽く立働と柔和といふは、研父母の心ふとがし次  
 家業も孝順といふは、中よりいふは、能初も人ふ裁

ざりた武内父母流り風和ふ悩しとまら大ふい  
 いと神佛の祈願し又を迷の人と頼る今も父母の  
 為ふ光明真言と呪く給るると歎き悔へられは誰か  
 彼が平生れ孝公と頼る、まを求めよ無むむむば  
 至誠必感といふは、や聖朝に父母共ふ起さといふは  
 とた人まら大ふいといふは、頼るるといふは、頼る  
 の路もよ涙と舎と謝ると言甚厚といふは、や  
 又まらが切りといふは、友まらにけいといふは、切り

父母の病を介抱し、病癒後母の身と若し時勢は  
 風流も知れず盛の道に逢ふのうゑては、  
 かさくかた又さあぐ、  
 此ら都々取らへど、  
 今一夜も治し、長命限をたれしは、  
 外も心も預る事なく、  
 以状からさう、  
 白金二十両紙浪入換後目料下りけり。

○豊屋の妻は清は妻は

豊屋の妻は清は、  
 衛南を業せり、  
 以より家業をせしつけ、  
 朋友の交賅ましく、  
 安んせり、  
 西大木村大和屋傳次郎と、



日氣相集る理りやけ婦人孝貞まのやうこそ男姑お  
まお能くうへくこそうけひこそう柔わうの家は此  
頂細の態もま父母よびひて招國よびひふは此  
主婦純孝の實情ねぶふ及ぶ故お親お通家らうい  
出入る者なつらひの下部ふまうまで言づらひ相懸りれ  
音は加へく懇ろふ出生れ養育も自然と善よけい  
らううや生まされたるをならうとて斯く家社齋  
い年成過く生度級いぬまば人ぐはく祿せん然ふ

不幸くく父大病は患い空しく成るるを  
病中おま書主婦看護おん力以り湯浴守り  
應否を考へ或は父の好まほし時宜よ急とて轉ド  
拓き神社遠を禱情極り誠と進一飲食のおハ  
費は厭いびらうぐく求め進免かろうぐ  
肩脊も是と接さるる多日の同例を遊むび實り  
寝食は廢せり没命ふりり主婦の慈傷他人も  
感及ふ禁えはらうや没後のいほり可憐過おん





玉田屋  
春吉



備前屋  
志ら

辨作  
卷之五

乞巧ぶぶふぶまで厚く施し過し過福の所作  
 見すく人それ威ド返さずて主婦の孝女始修志  
 母のんは能くけいけいれ全く健くて消閑よこそせ  
 平生績く紡ぎお経の慈を為るるまゝしきるを  
 事々そこれ側し母のこ一固はほい武に加功よお慈  
 の慈といふおむの間も老のんを慰むるれごとりに  
 おく笑おきまじりてへく睦まじり舞うる毎相おげ  
 早く起く母の口腹ふ可うれ慈人の食味と酒へ茶を

別お慈し母れ月のさしるはは母起おれは水漱  
 の具清くして供に食味茶と進むれより晨餐れ  
 役菜属肉類平生母の嗜ゆる品と要とをれも或も  
 乃にて指圖おきさしむんを用い酒和執薦れど  
 一夜も怠りぬるお母事茶代好ゆる茶と標  
 い求め行へ坐く常お茶確とけ修るるれや心に  
 とつけおく進む母とめお侍る是見ゆれば栄戲増  
 局むと取出し或ハ州家おがり雜劇お子おどるも

湯とて奥に老の退居とて暮らぬ夜もいつもきげ家  
りよとてやかくかづけ母の肩をば抱きとて或は医と  
招きとて按摩せし時刻を考へて母の脚具夏は涼  
冬はつらう用ひあつ付は暖むは冬とてやふとい  
らしく脚にひけ老母といぐればせし能くき  
ゆへに主婦の着者喜の繕ひたかづきふ公労もふん  
とあせし色も好ふまてえゆな故よ主婦を又  
母のんれ易きやうに取ひけいするものりうを骨

肉患情のまゝはとんや暑月もふ母はあつ  
ふ主婦の内簾とてはとてとてとてとてとてとてとて  
母の腕のまゝとてとてとてとてとてとてとてとて  
や一或は浴盤に入浴の時もきげも物とて母の肩  
背と撫も洗い静ふ浴一とてとてとてとてとてとて  
うへにまげまは浴室の側は溜めておぬい居るやと  
母ふまゝとて夜も母小用よ出るも冬もは頻けま  
ども其夜とて主婦の内簾はけく是も母れんげとい

うに甲に家も共よ二夜さぶお好く船よ美似又さぬ  
 く時宜よ多紫は托し母の心とやさうしむね  
 母平生導引を好りども毎日招く者おそし休  
 日多し然る日と程とをかりし竊よ医と招き並く  
 夫婦の者母おむいし幸よ導引送來を好し  
 まばとて進むも母よりさびてたのりさうや又母のツボラ  
 と啼きて夜食お用とて毎夕さうと具の品づくをば  
 ちげ孫め求免並んべつさうと調和し穢姪と察して

進む一夜も意さうのみなりし夫婦が至孝の徳熟し母  
 子れ恩親を深し母を酒と好まざれどもお世を清か  
 好むゆへ母ちげお者と潤へせお世を清よをり或も母子  
 三人對ふし樂りももさむしかりお世を清平生何  
 ろりとも皆母よ同く指揮おほし地家へ串賀の給  
 せお世を清しもお世を清と母よ又せしし國よに  
 せ家業よ入用の穀類と賣い行ふるも母れ指さし  
 惣ごも估ぶし時價の低昂と考へし除時の進退自

己の意指と見いどい入るも母もくろく持号より入  
初る多お利を得もむを後よりこびり顔もく  
打向い母人のうもお困る餘贏ち外お出り別を  
いしんとて柳の盛盛を役も母お供り家内とあごもん  
もか母のんはいさるしおおももさるほぶおは清まぬ  
が孝状見すく人の感激せざるもか一後よ 官儀よ  
預りも主婦もよ呼び出され市令の廳より於て褒  
賞の賚りう又文書下ると稱よ曰も方々魚く初状若

老母へ孝書を紙に記し 沖聞ふ 達し以所  
奇特の玉お付 沖齋員よりて自浪又杖乞を下  
るしは深心孝書相勵中次ぶくは

文化八年辰三月廿四日

○二宮村を助

ちを助に西く條郡二宮村の農氏より老母と二人  
にて浚學の負しれり限られし生質正路にておく  
母およくは久孝もを深りうりうりも然るも武夜



斯く白状の人の罪一人止まらば餘人の波及せざ  
 らんものと願ふの心も後をばつともしばは合さば  
 夜くも合さば居候も湿くもさうさうそおさうさう  
 斯くも殺す目と経れども少はさうさうけるがも阿ふ渠  
 が平生これけ状熟察の人の猶人精しく心ゆけられ  
 最後におもく少はさけられを助死むく重けさども  
 父母存命の内孝心極め厚く厚く事分めるれ  
 故にわくも褒賞とて罪と許さるも命けられ

人々驚に感ドらるるも人びとるハ罪の罪重候編  
 ぞ候多くハ死刑よりさうさう時なるとに此を助物か  
 助命の少はさうさう減ふ平生これ至孝全く天れ  
 祐と稱せりさうさうても至孝の稱のさうさう平生孝を  
 のり状を傳へ来りば今さうさうて求むるよ由かむ惜  
 び

けを助がさうさうハ森家社士に宮原何素ら人  
 國にびく後英田那香合の里小農と傲く仕む

時賣拂とくうりも 廢紙くわがの内うち見聞けんぶん之書のしよと題だい

一たふ私記しじ行いくさあぐねると載のる中なか一

見みえぬ傳つとへ人ひと行いり

○官部くわんぶ下村げむらは

もふも之采北條郡くわがやうぢうぢう之部べ下村げむらは信三しんさんとて田でん地ぢ僅ごんく

もらるる農民のうじんの娘むすめあゝ妹いもうとも二人ふたり行いり就中しゅちゆう世長せいちやう

女むすめも幼こころあよりなれ父母ふぼも孝かうなり一夜いっや他たふ嫁よめ一

をいども不幸ふしちやせ一々いっさまアは早はやくせぬ父母ふぼの家いへふ

帰かへ在ざいり親族しんぞく再嫁さいけと進すすむれども固かたく辞ことへりけ

がもい父ちち七十しちじゅうふ及び母ははも老おれまば二人ふたりの妹いもうとよ力ちからと添そ

へ家業けがふと励むも父母ふぼを後の安やす心しんの事を願ねがへり去さ

不ふに農業のうがふよめとゆぐぬ毎日まいにち未まぬすり書かて置おき

看みるまで草鞋くわしやとぬぐと寒暑かんしよとも厭いとむと女むすめの

態たいもや得えがたぬのも皆みな效ちかい見え耕牛かうぎゆうとけい

式しきも山やま入いり薪きん柴しばの類るいを薪きんと半はんに詰ぢめて

ゆへ又また橋はしまじ薪きん柴しばと山やまと運とぶるに物もの



擔つて仕らるゝ細くは漁づゝの修練たゞたゞは  
 れん のりふ 勝まるといふやうにと里人幸い稱こ  
 是全く口體を坐入の根えらば細民家此孝も  
 一とと親おちあふらるる母も父母すべし安をせり  
 扱あしりても老るのれいよふ家内おぬる時ハ父母乃  
 側を離まじ別を親しと懇ふうづら二人の妹も  
 孝く慈愛と加へく相慈ふ教訓の意もあやかりたり  
 られば親子兄弟も睦まじく睦まじくぞりりたる元來は之故

少しかゝるもみる田畑をればは世に寡一かゝるも  
 老く後却く寒隊の染いまる畏ま何忘ま被腹  
 教歌よ歲月と安穩よはまるとのハ偏小長女も  
 至孝の徳の成を所ありとやふれば其行状隠る  
 領主より褒賞の由はらちち寶曆三酉年孔方一  
 貫文下され稱美の命厚くぞりりけるは年長女  
 といふ二十九歳といふ安永元辰歳より一箇年に三  
 斗宛年々定例に褒賜らるるは

美作彦民訓 卷之三

六三

○中北上村と祿

中北上村の老民九郎太夫が、  
 九郎太夫が、早くやう、養子婿を、  
 一男子出生の後、いづれ、故に、  
 老母と幼稚の男子と、と、  
 せり、田地を、僅り、高三斗余、  
 四入可、痛て、  
 今、いよく、貧し、  
 老母よ、け、  
 玉て、考、  
 母と、幼稚の、男子と、と、  
 せり、田地を、僅り、高三斗余、  
 四入可、痛て、  
 今、いよく、貧し、  
 老母よ、け、  
 玉て、考、

毎日村内の家々、  
 子との、  
 桑、  
 終日、  
 告げ、  
 出、  
 母、



美作野見巳

中山上村と孫

三十一



坪井下村  
甚入高

美作野見巳

卷之五

三十五

實貞第一のいづく其志と稱する、暮方我が棲よ  
 仰しては先母の側へ依り安きは乃の飲食をわ  
 給仕ふと内も日勤め一態なりはめかきり  
 床の肘もと糸を我が子と母に左右小所し二便の  
 起臥も終夜へ休つち極りて懇るゝ家おん冬  
 と古き夾服一重に裯衣も著るや著るはと凌  
 ども母よと絮衣袴又蚊帳などもあぐと  
 心く相懸よ不自由なりしに元來は寡婦存心

の減るよふはアそ母營の芝居も玉く綿密あり  
 一と甚不熟の秋はうら若民一日窮なり相懸り  
 ぼる農家も租税違滞し或は救荒の訴へ喧しかり  
 き然るよは祈を里正より詢きし日限と後き上  
 納し固く懐しそ救いをも願はざりき或は人  
 怪しむる祈に祈言へたはとされは家おん  
 嫁妻弱子れ老母おまじと山奥のともれを小位も  
 寝足もん安さハ此真物と供ごらんうらと大切おはる

甲斐より毎日かゞ備貨の内を毎日くよ一袋二  
袋式ハ三袋又袋除ち行へる元より僅の文亦  
上納ハ一も方々一さばう預細を以て寡居の  
荒と顔ふぐれよとらうとせしめんとれん  
徳人と感ずらむ多しと語る人けり終よ  
領之褒賞の由はけりて室曆三三歳青銅を  
下し後安永元辰年より一箇のよ米三斗づ生  
年々定例ふ下らうと云後ふ日ドと云

○中北下村岩助

岩助も久米小條郡中北下村の岩氏より母ふつ之  
朝夕厚く喜ひ居業を励む勤めて年々貢物  
おしし期を得るべし生貨実員のすえゆを以て  
領之褒賞の由はけりて室曆三三歳岩助二十九歳  
母六十八歳此年青銅一貫文下し後安永元  
辰年より一箇年よ米三斗づは褒賜云後ふ日ド  
少くや

○中北下村平六

平六は久米小條郡中北下村小田地僅一石ばかり持る  
 玉極の貧民より孝心を以て保しつゝも甚貧にして  
 叔父父母の衣糧ふん力とて次第に公日傭又ハカ一づ  
 他人の用を辨し、外もさるぐの態をかざれば  
 あり得る所の價と以て父母朝夕の料よ供  
 じ父母頗年老ぬるゆへ只食むのて成を態と叶  
 へば平六をだふ出ゆく早朝ハ水薪かぶれさむけ

並けハ朝暮合おの饗ハ随々父母の態少潤了平六  
 いたしつゝ勵むかたもさるゝに限り限られぬ  
 濫褻ぐも夏冬もよんに任すに勤と過行も  
 妻とも求り得と、父母老後ハ寒脚とのうれ安ん  
 願つゝらあゝ、是夜とあゝも働く功と元來生徳直  
 柔和め、他人も愛せしめ、いれを以て郷人奇  
 特の氏ハ斯ふ輩とせり、つゞれとほ稱せり終ハ  
 領主褒賞の沙はらう、寶曆三酉年着納一貫文

下さう、此年平六四十七歳父六十九歳母六十六歳其後  
安永元石年より二箇年小米三斗づつ生涯年々  
定例の褒賜を授けられたり

○坪井下村甚八郎

志入高小父米小條郡坪井下村の驛小田地を備へて  
驛用と柳の高く紙業を以て常八郎といふ者の子  
なり父の死より弟は甚八郎の仲子なり初より父母  
に孝を盡く兄弟は睦まじく朋友は親を以て

終よ言葉いせと云ふ事十歳の時母が病に罹り  
父常入り実小も目も立行がき心地にて尚感涙り  
りし時小甚八郎父といふ事くされ歎き移し今日  
より我お母の代りて内とちり成合より方りと當りへ  
てかとは添へる其後毎日家内け合お炊爨する  
ま馬料の貯へ落四下湯の役小玉るまで残る限なく  
精しくもけま甚八郎初稚くも内政といひ皆樂し  
妻移く父替文よ安心せり實小天威の孝童なりとて

人皆感ト也。斯ノ歲月と送ル。其入夜毎初末  
明ニ起ル。新水小芳。て炊のい。野菜乃潤和  
又父兄小給仕。を祢人。ごろ。小取らつ。春勤切。おは  
不相應。う。朝夕炊のい。暑月も。寧月も。一日も  
鳥。更。う。勞。と。勞。を。言。寡。く。立。も。く。中。あり。や。う  
あ。く。生。賃。を。く。穩。順。たり。う。う。時。常。入。夜。が。宅。の。表。る。  
障子。け。獨。板。小。何。人。の。態。う。和。戲。書。ら。う。と。常。入。郎。推  
量。ふ。を。隣。家の。男子。に。態。う。う。と。怒。マ。れ。け。け。け。の。手。

出令。く。互。に。高。く。罵。り。争。い。と。止。ま。ぬ。時。お。甚。又。郎  
立。出。荒。雨。く。て。雙。方。と。う。ご。り。て。彼。紙。書。を。洗。い。拭。い  
く。ま。い。書。の。紙。落。く。中。の。板。と。成。ま。う。勤。く。と。け。海。ひ  
る。る。う。と。此。お。は。れ。や。る。う。あ。は。よ。化。せ。し。く。雙。方。此。争  
い。も。果。と。笑。い。と。成。ア。を。別。ま。ぬ。又。或。時。結。荷。を。送。る  
来。り。に。父。常。又。此。在。障。わ。を。け。け。く。の。け。の。け。子  
と。月。已。小。傾。ち。く。故。ゆ。を。け。夜。よ。入。ると。嫌。く。け。け。父。を  
驛。用。逃。る。魚。う。う。び。さ。う。馬。走。と。雇。い。せ。さん。と。心。せ。く



候よむ一かけが甚入る父のむづいといと見え阿兄又版  
 此炊と物一ほいふくお馬は引く系と一と心能  
 多しきんは父乃収い限りし一斯て未の刻れ未よ出  
 引ふ坪井縣より津山次場の同座まで行程三里うた  
 初めのためゆく夜よ入時刻遅く帰きとも父兄お向いて  
 労働修らると父よとほはくはひくうんと急さぬきとも  
 遅うりしほい見ふ子慣ききた嬰態よ受は使急  
 終いつてえといふ柔和の巻勤事のよくなり甚入る

平生の寛恕これけ頼とて童稚の輩ふ斯ふ行状  
 一うへにふあひび十歳の時母終ると以後ハ意匠初  
 暮といれも孝公保くして父お能つて見せお睦しく  
 熱して作業急くび奇特の少年たものからさるる  
 志きバ 領主より稱美の海はほりく青沼入貫  
 又下りて文書より其辭お曰甚入郎初より孝  
 心深く兄弟睦ましく朝夕家内け食おと炊しねせ  
 質柔和く心づけ宜しくゆえに仍て褒賞伴のゆく

よは成長のう人吾好いよ〜  
ゆはらうべき者より寛政六年寅七月朔日とす

とす此年甚入島十四歳  
美作孝民紀事之入終

